16 世紀フィレンツェにおける彫像の社会的機能による視点の設定
―ミケランジェロの《ダヴィデ》とその対作品案をめぐる一考察―

新倉慎右（慶應義塾大学）

彫像がどの方向から見られるべきかという視点の問題において、ミケランジェロが多様な視点の設定や影響力の観点から特筆すべき存在であることは、トルナイをはじめとしてミュソックら先行研究においてもその認識は一致している。しかしミケランジェロ作品における視点と作品の社会的機能との関係は、ほとんど考察されてこなかった。当時の彫像が有する複雑な社会的機能を考えるならば、ミケランジェロ作品の視点も社会的な文脈の中で捉える必要がある。本発表はミケランジェロの《ダヴィデ》とその対作品計画の過程で生み出された作品を取り上げ、社会的機能のもとで作品の視点を考察することにより、彼が最後に構想した《サムソンとペリシテ人》の視点がどのように決定されたかを問うものである。

《ダヴィデ》（1501-1504 年）の正面観と遠近法を利用した視覚修正は、もともとこの作品が大聖堂のバットレス上という高所に置かれた際に、下から見上げる視点が想定されていたからだと考えられている。それにもかかわらず《ダヴィデ》の設置場所は変更され、より近い位置から彫像を見ることが選択された。この理由は優れた造形だけでなく、共和国の危機に際して市庁舎の前に豪壮な彫像を設置することによる社会的メッセージの発信を優先したためである。《ダヴィデ》の例は、彫像の視点は彫刻家によって造形に込められた意図とは無関係に変動しうることを示している。

20 年あまり後ミケランジェロは《ダヴィデ》対作品計画に携わり、この際制作された《ヘラクレスとカクス》のモデル（カーサ・ブオナローティ）において、彼は複数の方向から観賞しうる多視点性を盛り込んでいる。発表者はかつて、こうした造形が、現在バンディネッリの《ヘラクレスとカクス》が設置されている場所を前提としたものであることを指摘した。一方でこの作品の後、全周囲を鑑賞しうる造形となった《サムソンとペリシテ人》（モデルのコピー、バルジェッロ美術館）が、なぜそのような造形になったのかは解明されていない。

以上を踏まえて本発表では、《ダヴィデ》と《ヘラクレスとカクス》、《サムソンとペリシテ人》の視点を社会的な状況と結びつけて比較し、社会的機能という観点を導入することで、《サムソンとペリシテ人》の特徴的な視点が社会的機能により決定されていた可能性を示す。設置場所に適した 3 方向の視点を有する《ヘラクレスとカクス》から、全周囲に連続した視点を配することで開けた場所への設置が必要な《サムソンとペリシテ人》への飛躍は、市民の広場における公共のためのモニュメントという社会的機能を前提とすることで実現したと考えられる。最後の契約で設置場所が変更可能になったことを踏まえるならば、《ダヴィデ》における視点の変動の例とは逆に、ミケランジェロは彫像がもつべき社会的機能の側から設置場所を求め、それに適した視点を生み出したのである。